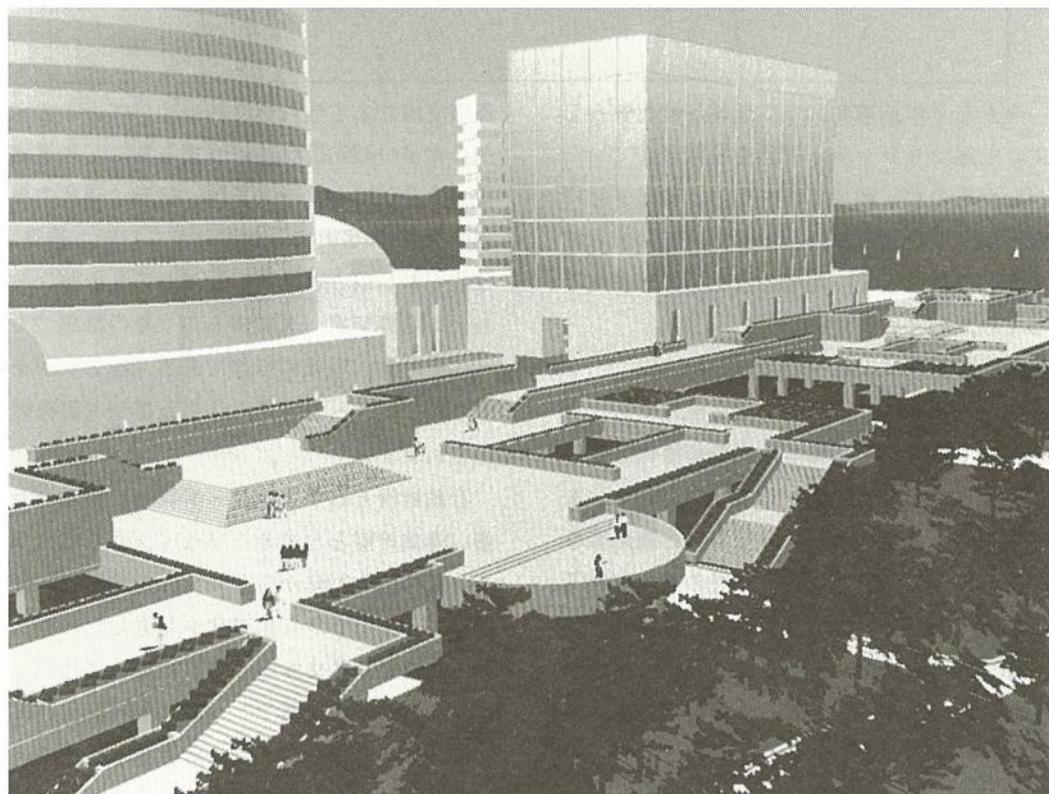


アルパック ニュースレター



高松港港湾景観形成のC.G.による景観シュミレーション
 (制作：大阪大学 笹田研究室)

アルパック ニュースレター もくじ

- 動きはじめた七尾フィッシャーマンズ・ワーフ…………… 2
- イメージとリアリティのインターフェイス…………… 4
- 大山崎町 天王山の景観をめぐって…………… 6
- ボランティア論…………… 8
- 沖縄建築紀行…………… 9
- 第4回巨木フォーラムに参加して……………11
- うまいもの通信⑩……………12
- 新刊旧刊書評紹介……………13
- まちかど……………14

動きはじめた七尾フィッシャーマンズ・ワーフ

金井 高造

今から7年前昭和60年に地域活性化策として、七尾マリンシティ構想を提案させていただいたものが、地域で芽を出し、昨年9月に第一期「能登食祭市場」として開業しました。7年を振り返って、地域活性化の課題を整理してみたいと思います。

拠点施設づくりのねらい

地域振興をリードし、地域活性化をもたらす施設であり、消費者ニーズの多様化、個性化、心の豊かさの時代を先取り、都会センスのヤング、主婦、地元ファミリーと観光客をターゲットにしています。施設のキーワードは「人・海・祭」とし、能登生鮮市場・能登銘産・工芸館・能登グルメ館、能登祭歳時館より構成しています。人、もの、情報の交流・発信拠点として、地域おこしを「能登のこころ」のターミナルによる求心力づくりにおいでいます。施設は5千㎡で、建設事業費が約12億円（七尾市人口5万人、商圏人口約20万人）です。

拠点施設づくりの経緯

この構想は、地域の経済の地盤沈下に対して、地域の自らの知恵と力で活性化をはかろうとして企画された地元七尾JCによる市民大学講座からスタートします。この中で、今野修平先生とも相談して、港湾都市のアイデンティティとしてマクロからの都市づくりの歴史にたちもどった「七尾マリンシティ構想」を提案しました。地元が「海（港）・人・まち」の結合による七尾の再生に立ちあがり、人づくり（研修）が開始されます（1年後）。先進地に学ぶ企画は毎年実施され、約100人を派遣して、まちおこしの中核となっていますし、

国際交流による活性化に結びついていきます。

2年目の昭和62年には、まちおこし推進組織づくりがはじまり、民間、行政、市民の参加（会員150名）で「七尾マリンシティ推進協議会」が結成されます。地域おこしの熱いおもいの結集です。次にまちづくりの構想づくりへ発展し、地元の合作である「構想」が発表され、イメージを具体化した模型も製作展示されます。

行政計画として、調査・計画し、市総合計画、港湾計画としてオーソライズされるのが4年目の昭和63年から平成元年です。行政計画は、「構想」から事業化を見通した計画として具体化されます。5年目には、活性化イベントとして「国際テント村'89七尾」が以後3回（3年間）開催され、事業化の気運の盛りあげと関係者の協力、ノウハウの蓄積が進んでいきます。6年目に第3セクターが創立され、建築設計・建設・テナント募集・開業が進んでいきます。（平成3年9月21日開業）

七尾フィッシャーマンズの現状

石川国体・七尾線電化と合わせて開業されましたが、秋・冬に向っての開業、宣伝の弱さにかかわらず、初期の来訪者及び売上げ目標を確保しています。今後、港内遊覧船の開業、第2期埋立事業、和倉温泉・能登観光と連携しての発展が期待されています。

地域活性化の原点—地域C、I—

地元民の公私にわたる幾多の経済興隆の施策の中でところをとらえたものは、地域の歴史・文化からくる地域個性としての「誇り」であったと思います。フィッシャーマンズは本来的に漁村の土壌のない所では人工的になら

ざるを得ず、コンセプトとしては、適切ではないと感じています。時流を考慮しつつ、海（湾）・人・まち」にこだわり、拠点施設は「人・海・祭」をキーワードにしました。地域活性化の原点を見つめることの大切さを学びました。

人づくり・研修は独自の課題

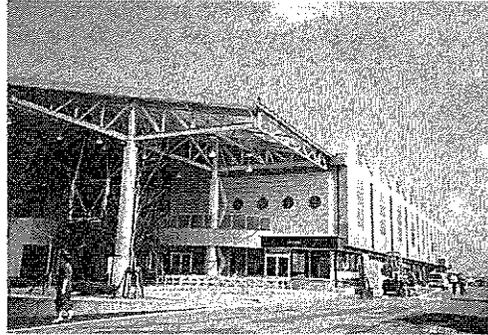
これ程、速く事業化した背景は、色々な要因があると思いますが、地方都市（人口5万）では困難な課題が山積している状況で少しでも成功裏に活性化を進めるためには、人づくりの独自の追求が重要であることを痛感した次第です。人と人、人と文化の交流は爆発的な力を発揮するものです。5年10年の長丁場の事業では、20人/年×5年=100人（海外視察派遣等）の力がまさにものをいいます。

まちづくり計画と事業化へのつなぎ

まちづくり計画と地域でのオーソライズ、市民広報と合意形成は一步一步進めていくとしても、事業化となりますとリスク負担の問題と決断の課題があります。七尾の場合でも、地域活性化の第1弾として後にはひけないという状況もあり、地元の行政経済団体等が英断することとなりましたが、その時、時期を逸せず人脈を活用して英断に至らせた各界のキーマンの存在が大きな役割を果たしました。まさに地域づくりは、人と人づくりだと感心しています。

第3セクター（官民の場合）

官主導・民主導以外の官民協力による民的事業（地域活性化）の第3セクターの場合、事業内容のプロ（コンサルタント）との人脈の確保・活用が重要です。今回の場合も、コンセプトづくり、需要予測、建築、テナント募集、活性化イベント等、事業化の時期に応じた人脈の対応が課題になりました。また、事業のリスク対応の面でも、地域活性化の視



点から各界が総力をあげて対応するといった決断が大きな力を発揮しました。

需要予測とテナント募集

地方都市の場合、なかなか床需要が出てきません。従って、入居していただくテナントに明確な需要を示せない場合が一般的です。今回も、全国大手、金沢の大手等他力を借りる努力はほとんどダメで地元の自力発揮に落付きました。この場合、施設のコンセプトが非常に重要になります。需要を創造するという地域と時代の課題に挑戦することになります。また開業して痛感したことですが、和倉温泉（180万人/年）、能登半島（770万人/年）の広域観光客にも助けられることになるわけですが地元の人の集客力と魅力化が基本であることを学んだ次第です。

集客力を上げる課題

第2期事業に加えて、駐車場確保、港内遊覧船観光ルートづくり、イベントと情報発信など課題が山積しています。今後の関係者の方々の御努力を期待しているところです。

コンサルタントの役割

私自身も色々関係させていただいてきましたが、建築のことも含めて勉強させていただきました。また、各専門分野のプロとのネットワークの大切さを痛感し、地元には、それぞれの素晴らしい人材のいることも確認できました。七尾の件でお知りにならない方がおられましたら、お申し付けください。

イメージとリアリティのインターフェイス

—高まるC.G. (コンピュータ・グラフィックス) への期待—

内村 雄二

昨年、高松港港湾景観整備計画調査（委託者：運輸省第三港湾建設局及び香川県）を実施するにあたり、C.G.の第一人者である大阪大学の笹田教授の御協力と調査の御指導を頂いた。この貴重な経験を通じ、景観計画におけるC.G.の役割等について感じることを述べたい。

景観に対する違和感の払拭

景観計画には、3P1Dが必要だと言われる。つまり、フィロソフィー、ポリシー、プランを意味する3つのPとデザインのDのことである。いわれてみるとなるほどと頷ける気もするが、一般の人々には馴染みにくい。理屈よりは、3P1Dが考慮された実像が求められる。

そのためにはまず、日常における景観認識に近い状況、情景を提供するとともに、景観を語る場や検討する場（機会）をつくる必要があり、そうすることで誰もが同様の感覚的条件のもとでフェアな議論をし、景観モデル的なものを構築することができる。

これを実現するツールとして、C.G.は極めて効力の高いものと言える。景観に対する抽象的な論議を、具体的な映像（イメージ）の中で検討することができ、景観を身近なものとして捉えさせてくれる。

計画内容（ディテールから総体まで）における合意形成の促進

C.G.は、数十万分の一から現寸に至るまでの情報を同次元内に入力でき、目前の物体（近景）から風景（遠景）までをアナログ的に見ることができるので、臨場感にあふれて

いる。つまり、入力データに応じた映像が、人間の視点や視線でチェックできる。さらに、平面、立面、断面、詳細図といった図面的なアウトプットが、必要なスケールで得ることができ、仕上げまでの段階的記録がされている。つまり、作図の過程やノウハウが一般情報化できるので、計画または設計者の考えを普遍的に伝達、継承することが可能である。

景観計画は、個々の形態（ディテール）の洗練性と個が集まった総体としての調和性に依るところが大きく、この両者を様々な角度から具体的イメージの中で検討し、人々の合意形成を図る必要がある。実は、これがなかなかスムーズにできなかったところに、景観破壊を放置せざるを得なかったひとつの原因がありそうに思える。そういった意味からもC.G.は、景観計画の福音といえる。

景観計画におけるプロセスの共有

C.G.最大のメリットは、オペレーションを除けば誰でも景観計画の検討に参加可能であるということだ。景観プロだと思われる人々の独断を容認しない。

景観計画は、本来そういうものでないといけないはずである。少なくとも人々は、自分のまちをよく見て、まちの姿に関心を持つべきである。歴史的まちなみなどを見る限り、日本人は元来景観に鋭敏なはずである。

複雑に、また錯綜した発達経緯を持つ我国のまちの景観を考える上で、有志が同じ土俵に立ち、いっしょに景観形成の行方を探る時期が再来している。高次高度化した現代のまち故に、昔のような平面的で分かりやすいま

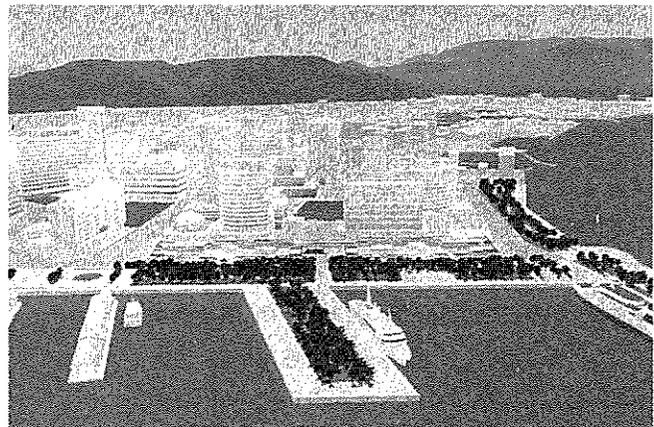
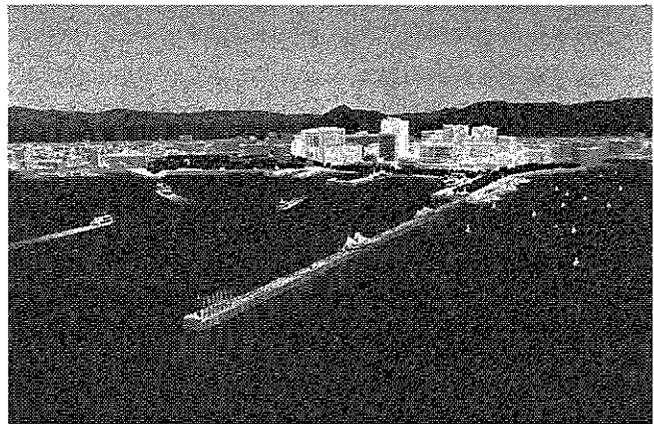
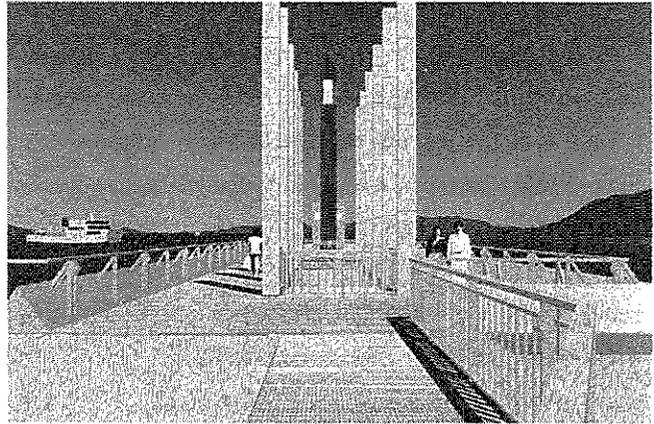
ちを見るようにはいかないが、C.Gの役割は、
そういった環境に置かれた現代人にとって、
共通の意識を育成するための貴重なインター
フェイス（媒体）にあると思う。

このような仮想現実（バーチャル・リアリ

ティ）をうまく活用した、何らかの合意点、
共通認識のもとにできる景観イメージの指針
は、新たな都市文化や建築文化を創造してい
くうえで、不可欠なものになると思う。

（大阪事務所 うちむら ゆうじ）

コンピューターグラフィックス
による景観シミュレーション



泰さんのあんな京都こんな京都⑦ 大山崎町 天王山の景観をめぐる

山田 泰造

京都府の西南部に位置し、大阪府島本町と境を接する大山崎町は面積が府下最少の5.97 km²、人口16,152人にすぎぬ小さな町です。全面積の1/3が山地部で歴史に名高い天王山、1/3が平地部で天王山が淀川に迫る幅300～400mの狭隘な部分には新幹線・東海道線・阪急電車・名神高速道路（車線増設工事中、インターチェンジ計画中）・国道171号等が集中し、1日100万人の人々と膨大な貨物が通過する日本でも希有の町であり、残り1/3は三川（桂・宇治・木津）が合流し淀川となる雄大な風景に恵まれています。今回は最近話題になっている天王山の景観問題について報告します。

天王山をめぐる最近の動き

天王山は標高270.4mにすぎぬ小山ですが、天正10年（1582年）6月13日秀吉と光秀が天下分け目の戦「山崎の合戦」を行った所です。京都市景観の要である京都三山の一つ西山連峰の南端にあり、古くから都への入口として重要視されてきました。この天王山をめぐる最近の動きを例挙しますと、

(1) S42 —— 山頂15haに大規模な遊園地建設の噂が町内に広まり関心をよびましたが、やがて消滅しました。町は今後の事を慮って、町の指導によりS47全町的な「天王山をまもる会」を発足させ、住民意識の向上を図りました。

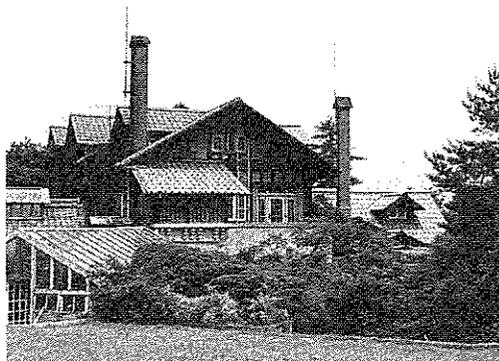
(2) S63.9 —— 天王山中腹標高80～90mにある大山崎山荘（以下山荘）を所有する不動産会社が2～5階建マンション139戸の建設計画を町に持ち込み、これを知った住民から一斉に反対運動が起こりました。以下次項に。

(3) H3.4 —— 関西財界人を中心に「歴史街道

推進協議会」が設立され、宇野収・関経連会長が会長となり、伊勢から奈良・京都・大阪・神戸にいたる300kmを結び、神代～現在までの関西の歴史と文化を見直そうという構想を発表しました。この構想は近畿ならではの地味ではあるが期待される計画として評価され、天王山は織豊時代の歴史を語る好個の場所として注目されています。

大山崎山荘のマンション化計画

天王山一帯はS32.5都市計画区域に入り、44.4近郊緑地、46.12は市街化及び調整区域、47.9風致地区等の指定を受け、建築・土地造成・木竹の伐採には規制があり、知事の許可が必要です。山荘の一部は調整区域ですが大半は市街化区域で一種住居専用地域、更に近郊緑地保全区域、西国風致地区に含まれています。申請者は規制規準を考慮に入れて町に事前協議を求めました。住民運動は大きく盛り上がり、「まもる会」等8団体や周辺自治会を中心とする対策委員会が結成され、町や町議会に天王山景観保全と公共施設の誘致を再三要望・請願し続け、町も住民の意向をもとに府に積極的に問題の早期決着の協議を重ねました。京



大山崎山荘の全景

都府も早期の解決が必要であるとの共通認識のもとに、山荘とゆかりのあるニッカウイスキーの筆頭株主アサヒビールに相談しました。社長樋口慶太郎氏が京都市内出身であった事等から、まず両者による用地取得（全面積18,500㎡）を行い、34億円余を京都府・アサヒビールがほぼ1/2ずつ負担する事に決め、H3.3知事が発表しました。山荘の今後の利用については公共性の強いもので、且つ周囲の環境にふさわしい施設を目下、町・府・アサヒビールで検討中です。

大山崎山荘の由来

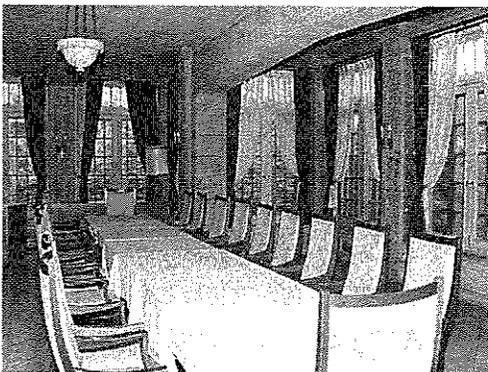
ニッカウイスキー創始者の一人であり、又登山家として有名であった加賀正太郎氏は英国テムズ川流域にあるウィンザー城からの眺望に似た地を求め、深い緑の山と三川が合流するこの場を選び、大正末期から昭和初期に山荘を建築しました。木造3階建延2,000㎡、外部は表面を焼いた木材を意匠に配し（ハーフティンバー）、外壁にはタイルを貼り、切妻屋根を縦横に組合せた複雑な外観、二階からバルコニーに出ると三川が一望の下に眺められます。夏目漱石、鳩山一郎等の著名人を招き、花見・月見や園遊会等を開き多彩な生活を送っていました。氏の没後（S29）山荘は次々と人手に渡り今日に至っていきます。

大山崎山荘を訪ねて

府民祭典・乙訓'91の行事の一つとしてH3.11.3山荘の特別公開があり、私は期待感に溢れ山荘に向いました。庭園は松・楓・椎等の大木や竹林に覆われ、広場では和服姿の婦人による野点・弦楽四重奏・琴の合奏が参加者の心を和ませています。英国風の古い農家を思わせる山荘から発する先人の遺氣と、深い山と木々から発する冷気にうたれ、しばしその場を去るにしのびませんでした。

天王山山腹に違和感のある建物の出現を見る事もなく、天王山の景観は住民・町・府・企業の見事な連携により無事守られる事になりました。府は既に創設した「緑と文化の基金」（積立金100億円）の活用で、また企業は通常のメセナ以上の熱い想い、即ち京都の人々のお役にという厚意で、時機を失することなく、この問題を解決する事ができました。山荘全体が公共性に富んだ、しかも周囲の環境とマッチした優れた作品となって生れ変わることを期待します。

（京都事務所 やまだ たいぞう）



広間風景



バルコニー

「ボランティア論」
 ～「人のため」より「したいからする」～
 高田 昌幸

特別に私はへそ曲がりでもないと思っているのだけれど、嫌いなことの一つに、「人のため」を他人から勧められること、つまり善行を無理強いされることがあります。

これはとにかく本能的に嫌なのですが、あえて説明するなら、そこに二つの理由があります。一つは、どうもあの人を見下した態度というか、我々はあなた達と違って世のため人のために何をすべきかを知っているのです、と世間に示すような態度、もう一つは、世間の人々より一段高いところにいて人々の一部をかわいそうな人呼ばわりする高慢な態度が鼻につくからです。わかった、わかった、あんなは偉い、と思います。

世間には、たまたま恵まれた人々がいて、たまたま恵まれない人々がいますから、努力して皆が恵まれた世間を築くことは大事なことです。また自分のちょっとした気遣いで世間の人に喜んでもらえるというのは単純に自分のいいものです。しかしそういうことは、とても個人的に認識すべきことであって、何もひとを巻き込まなくてもいいではないか。それとも「人のため」を世間にデモンストレーションするのはそんなに気持ちの良いものなのでしょうか。

余談ですが、最近、ちょっと気になる言葉に、「貢献」があります。私たちは、そんなに偉いのか。

関連して、「ボランティア」について少々言います。

「ボランティア」というのは元々は英語で

すが、本来の意味は、「自分で進んで人に良かれと思って行動すること」ということです。注目したいのが、自分の意思に基づいている、ということです。したいからする、ということです。しかし英語圏の社会、文化的背景と異なる背景を持つ日本にその言葉が入ってきた時には、本来の意味が変化して、「世のため人のための無料奉仕活動」となってしまったようです。これは、行動が自分の意思に基づくというよりは、「人のため」という名目が自分を規制しているという点で、正反対の意味になってしまったと言えるかも知れません。

別に英語圏の人々は本当に心優しくて、こっちはそうではないという訳ではありません。彼らのみっともない部分も同様に感じます。しかし、「ボランティア」という言葉が錦の御旗にされたのでは「ボランティア」がかわいそうです。真面目にボランティア活動をしている人ほどこのへんのことには敏感で、だから世間に対してよけいな気を使って、慎重になられている、という状況も気の毒です。

私は、何かある毎に「私は一体何様のつもりだ」と常に問いかけるようにしたいと思っています。あまり世間に対して大げさにならないようにしたいものです。

本当は次のことを言いたかったのですが、私たちの仕事などは、どうかすると世のため人のためにやっているんだ、俺はつらいけど「人のため」なんだ、と言ってしまいがちのようです。ちょっと変態みたいです。自分がしたいからする、何か文句あるか、と、そういう態度でいたいところです。

(九州地域計画研究所 たかた まさゆき)

沖 縄 建 築 紀 行

高坂 憲治

ちょっと古い話で恐縮ですが、昨年10月に沖縄に行く機会があり、僕の若い頃話題になった建築の〈その後〉を見ることができました。およそ10年ぶりの沖縄は、自動車専用道路ができ、1日の行動範囲はかつての倍近くに広がっていました。

僕が最も興味があったのは、「象設計集団」の「今帰仁村公民館」と「名護市庁舎」でした。10年前に訪れた時のいいようのない感動がもう一度味わえるのか、期待を裏切られないだろうかと半分は不安でもありました。建築の使われ方や維持管理の状態は、建築が生きている証であり、竣工直後のピカピカの建築をみるよりずっと楽しいものです。

今帰仁の公民館も名護の市庁舎も、再び僕を裏切ることなく、新鮮な迫力で迫ってきました。ただ残念なことに、今帰仁の屋根を被

っていたあの蔓草は跡形もなく消えていました。台風で蔓草が這っていた下地が壊れてしまい、再び緑で覆うために現在計画しているとのことです。朱塗りの列柱は多少色褪せたとはいえ、むせかえるような強烈な風土の印象を与えていた屋根の緑が、この建築にとって生命であるということを改めて感じました。もしも屋根が緑に被われていたら、公民館の講堂から聞こえてきた老人会の人々の大正琴の音色は、もっと僕の心にしみとおってきたと思います。

名護の市庁舎は10年まえに比べると少しは冷静に見ることができましたが、武骨なまでに徹底した思想には再度感動しました。ただ僕はそれぞれのテラスを被っていたブーゲンビリアが10年もたったら建築全体を被う姿を思い描いていたのですが、何故か10年前と変わっていませんでした。剪定してしまっているという話を聞いたことがありますブーゲンビリアがこの建築を成長させていると信じ



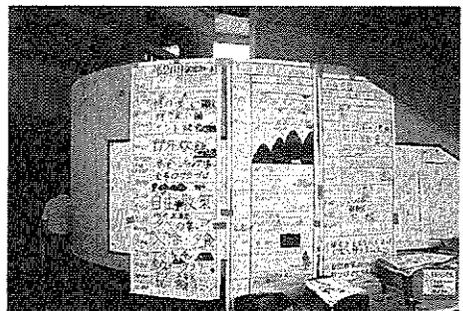
今帰仁村公民館
(屋根を被っていた緑がなくなっている)



石川市少年自然の家



名護市庁舎
ルーバーとブーゲンビリアに被われたテラス



石川市少年自然の家 (自然学校のメニュー)

1992年3月1日

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

ていたので、少しばかりの無念さを感じました。

この2つの例は共に、建築と緑の共生関係（いいかえれば、人間と自然の共生）の維持には相当の努力と工夫があることを示しているように思います。

石川市には仙田満氏の石川市少年自然の家があります。海の見える丘に建つこの建築も今帰仁と同じ時期に建てられたもので、斜面地にコンパクトに設計されています。ハブの恐怖と闘いながらナイトウォーキングする子供たちに団結と思いやりの心が芽生えているというお話を伺いながら、海に向かったピスタの中の巨大な火力発電所の煙突や、隣接地のゴルフ場開発計画というプレッシャーの中で、この建築も苦闘しているようでした。

さて、今回の沖縄ではいくつかの比較的新しい建築もみることができました。今帰仁の近くで象設計集団が琉球銀行を手がけていました。「象」の〈その後〉といった感じでした。

1991年日本建築学会賞を受賞した地元の建築家真喜志好一氏の沖縄キリスト教短期大学

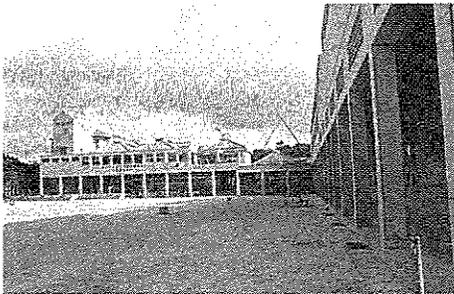
は、打放しの空間もさることながら、ローコストへの挑戦の姿が見えました。

原広司氏の城西小学校は隣接する守礼の門を意識し、沖縄の集落をモチーフにして、景観論からの設計といわれています。生徒達のサインのある赤瓦をのせた沖縄民家風の屋根の下の天井は1つ1つ異なり、通風を考慮したオープンプランの平面の中で生徒達に独自の領域感を与えていました。

大谷幸夫氏の沖縄コンベンションセンターは8年の歳月をかけて取り組んだ作品です。劇場棟・会議棟・大展示棟の3つの棟がそれぞれ深い軒をもち、緩やかにうねった大屋根は沖縄の自然の様々な姿を連想させています。

今回沖縄で見ることでできた建築を通して、それぞれの人がそれぞれの手法で沖縄という強烈な個性ある地域に挑んでいるのを感じました。それは同時に僕自身の仕事のスタンディングポイントを再確認する上で大いに参考になりました。触発されるものでした。

（大阪事務所 こうさか けんじ）



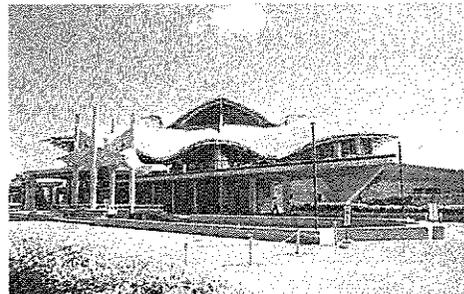
城西小学校全景



沖縄キリスト教短期大学全景



城西小学校民家風屋根の連なり
(守礼の門がみえる)



沖縄コンベンションセンター
(大展示棟)

第4回巨木フォーラムに参加して 「みどりのほご」を考える

鵜飼 奈弓

最近、まちづくりの目玉として、もしくは施設の魅力付けのため、緑化が果たす役割への評価が高まっており、現在もいくつかのそうした業務に携わっている。その関わりの中かで、昨年10月19～20の両日、静岡県函南町において開催された全国巨木フォーラムに参加した。これは昭和63年に兵庫県柏原町で始められたもので、昨年で4回を数える。柏原町では、町のシンボルで県の天然記念物にも指定されている大ケヤキの樹勢が衰えてきた時に、木を守ろうという町民の声が高まって、それがフォーラム開催のきっかけとなり、ついには根の成長を止めていた役場庁舎の一部を撤去するまでに到ったことでマスコミにも取り上げられたりしている。

今回訪れた函南町は、伊豆半島の付け根の西側で、富士山を臨む風光明媚な温泉地であり、箱根の外輪山にあたる森林が町の大部分を占めている。この森林のうち、函南原生林と呼ばれる223ha程の一带があり、これは江戸時代から禁伐林として保護されてきたもので、そのため樹齢700年クラスのアカガシ、ブナの巨樹が残っている。周囲は原野に囲まれているため野火の危険性があるが、林縁に耐火性のあるコナラが繁茂しているためによく守られてきた。標高600～800mに位置する自然林のため、遠くから見ると人工林とは違って多種の緑色が積み重なった様な特徴的な林相を示している。

近年、環境重視や自然保護といった観点から、また森林浴という健康面や心の安らぎを求めるために、森林の保護が強く訴えられつつある。実際、水源涵養林としてだけ残されるのではなく、野鳥の森とか観察林という形

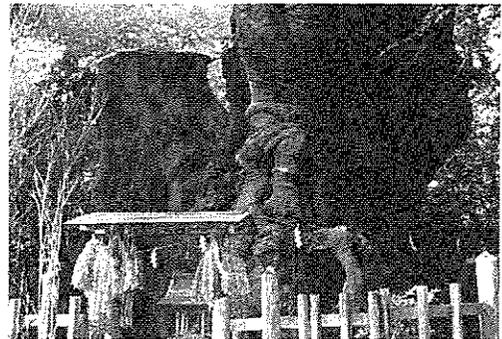
でレクリエーション・学習林として整備される場合も増えてきている。また、森林以外にも、たとえば街路緑化などで都市の緑を増やそうという動きも多い。

一方で、現代の市街地で唯一昔のままの姿で大切に保存されてきたはずの「杜（もり）」＝鎮守の森が、地価高騰の時期に節税対策のため次々に伐採され、神社経営の駐車場などに変わってきている。当時開発圧力が一気に高まった都市周辺の山林にしても同様で、一般国民の想いと森林所有者の事情に乖離が見られるのは町並み保存問題と同じことである。

ところで、現在残っている樹齢何百年といった古木（あえて巨木とは言わない）があるのは山林中よりも町なかのほうが圧倒的に多いという。これは土地の人が畏怖し、敬い、大切にしてきたからにほかならず、その木にまつわる歴史・伝説といった文化に護られてきたのだといえる。逆に山の中のものには割にたやすく伐られるということであった。

鬱蒼と繁る山林に囲まれて暮らしていた時代は去りゆき、現代我々の周囲においては、山林は過去における鎮守の森程度の存在に縮小されているような気がする。それを保護する立場にたっているとすれば、古木がむしろ町なかに残るといふ現象は、示唆的といえないだろうか。

（京都事務所 うかい なゆみ）



天然記念物「来宮神社の大クス」

うまいもの通信⑩

足助町Z i Z i工房の

手づくりハム・ソーセージ

吉田 道子

アルパック25周年パーティで名古屋の味の一つとして、愛知県足助町のビーフジャーキーを持参しました。肉質が良く、スパイシーで「Z i Z i工房の味自慢」の名の通り、かなりイケます。因みに90g1,000円、ロースハム「Z i Z i工房のこだわり」では500g 2,000円近くしてしまいます。

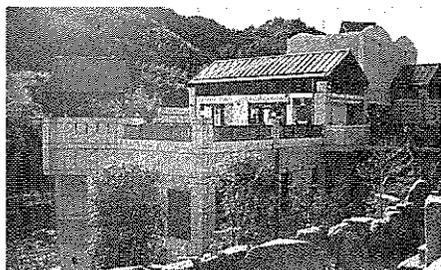
この高級手づくりハムを作っているのが、足助町シルバー人材センターの高齢者の方々、つまり「Z i Z i」達なのです。

山村の新しい特産品“肉の漬物”づくり

足助町がハムづくりを始めたきっかけは、川魚、山菜の典型的な山村特産品からの脱却です。原料が町内になくても簡単に調達でき、お年寄りが家に持ち帰って孫に喜ばれるものをというわけで肉の漬物、燻製であるハム、ソーセージの製造が始まったそうです。

外から一流の職人を呼び、鹿児島島の黒豚など一流の原料を使った本物志向と、日産200kg程度の限定製造、工場のある町営福祉施設「百年草」の直売及びゆうパック小包の限定販売、といった稀少性が売りものになっています。

ギフト用に官製ハガキの注文票も用意され、



百年草外観。後ろは足助川

抜け目がありません。(かくいう私もつい、利用しました。確かに便利です。)

「百年草」の洒落たレストランではハムやタン、ソーセージなどのコースやディナーが楽しめます。他に、足助産の川魚や山菜を洋風にアレンジした健康メニューもあります。

“若いも若きも一緒”の足助町福祉センター 社会福祉センターにディ・サービスセンター、さらに(高齢者生きがい活動推進施設)の3つを併設したのが「百年草」です。

高齢者生きがい活動推進施設は、高齢者の社会参加の拠点として、1985年度から県が助成制度を設けて整備を進めているものです。

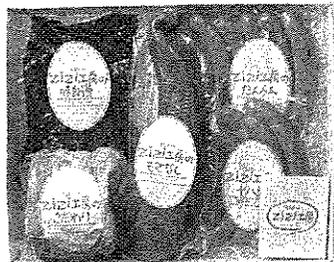
といっても、お年寄りや病弱な人だけでなく、健康や交流をテーマに若者や観光客にも広く門戸を開いた風通しの良さが特徴。特に鉱泉を使った“百円風呂”は眺めの良さといいい、快適です。健康食+鉱泉浴のヘルシーなお手軽レジャーが都会人にも受けているようです。まさしく百年草は「心身疲労回復センター・健康施設&観光施設」といえます。

足助町は特産品づくりを通して高齢者に生きがいを与え、百年草を通して高齢者と若者、山里とまちの交流の場を提供しています。むらからまちが学ぶことはとても大きいと感じました。(名古屋事務所 よしだ みちこ)

〔Z i Z i工房商品の申込、問合せ〕

(社)足助町シルバー人材センター

tel. (0565) 62-2166



ギフト用のハム・ソーセージ等詰合せ

新刊旧刊書評紹介

21ふるさと京都塾編 かもがわ出版

『ふるさとづくり読本① 人と地域を「創る」
10人からのメッセージ』

紹介 高橋 光雅

農林水産省は1990年代の農業構造改善対策の柱として、生き生きと取り組める農業の確立とみんなが住んでみたくなる農村づくりを目標とした「農業農村活性化農業構造改善事業」をうちだし、国・都道府県・市町村の各段階における“21世紀村づくり塾運動”を提起してきました。そういった枠組のもとで、平成2年9月に発足したのが「21ふるさと京都塾」であり、平成3年度現在、京都府内で10の市町村塾がつくられています。

国がこういった村づくり運動を提唱するのは、これまでも農業や農村が大きな転換期を迎えた時に何回かあったようですが、「大店法」緩和と抱き合わせにした商店街支援施策と似ているような気がします。農業・農村や商店街のいずれについても、根底にある外的要因に対策の手が及ばない限り、危機を脱し得ないものではありません。担い手の意識など内的要因を無視することもできません。そういう意味では、今回の村づくり運動が「人づくり」を重視している点に注目したいと思います。

ここに紹介する『ふるさとづくり読本・人と地域を創る』は、村づくりや塾運動の視点、「市町村塾」の活動を支援する立場にある「京都塾」の役割等について、さまざまな分野の専門家10人からのメッセージを運動のテキストとしてとりまとめたものです。アルパックの金井社長も塾のシンクタンクとも言えるこの企画研究会に委員として参画されています。

言うまでもなく、地域づくりや人づくりと

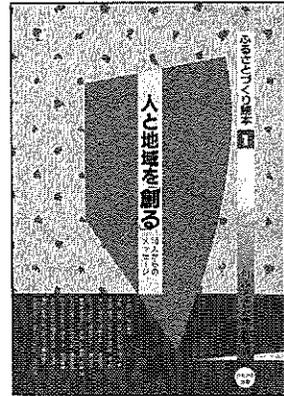
いうのは“こうでなければならぬ”といった性格のものではなく、あくまでも地域の実情に応じた実践的運動としてとらえることが大

切ですが、現在直面している農業・農村をめぐる情勢は、“ただ取り組んだ”というだけでは許されないほど切迫した状況にあります。運動が事業に結びつき、“実があがる”ことも重要なことで、そのためには他産業や都市サイドとのネットワークや専門家からの理論や手法についてのアドバイスも重要だと考えられます。

この「ふるさとづくり読本」シリーズは、実践と理論が相互に刺激し合い、そのコミュニケーションが人を育て、地域づくり運動を発展させていく、そういう循環をつくり出す役割を担っているように思います。

現在私自身も、「京都塾」の仕事に参画していますが、これからも共感をもって各地域での実践に触れ、実践と理論との橋渡しができると思っています。

(アルパックOB・地域づくり総合企画代表
たかはし みつまさ)



まちかど

テーマパークのゴミ箱

中川 天晃

新しい遊びの空間として各地でブームを巻き起こしているテーマパーク。

楽しい！おもしろい！だけではただの遊園地、よりハイレベルな非日常空間の提供のためテーマパークは日夜いろいろな視点から気を配っている。

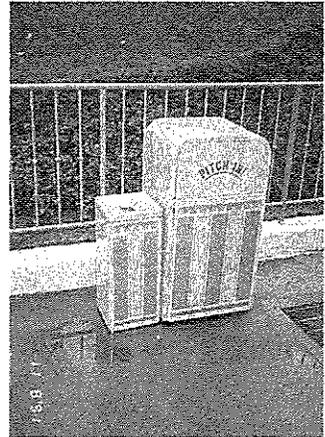
関西圏からの集客も見込んだ四国初の本格的テーマパークとしてオープンしたレオマワールドは、ウェルカムプラザ、キンダーガーデン、マジカルストリート、オリエンタルトリップ、レオマリゾートホテルの5つのゾー

ンからなり、明確なカラーリングによるゾーンごとの統一イメージ演出がしっかりと計画されていた。

そんな中で、普段は脚光を浴びることの少ないゴミ箱も単なる汚物入れとして扱うのではなく、そのゾーンごとのイメージカラーに適したカラーできちんとお化粧され、「レオマワールドのゴミ箱なんだぞ！」とはっきりした主張を持って美しく立派に活躍していた。

汚いものを隠すといったレベルでしかない都会のゴミ箱もレオマワールドに匹敵するレベルのアイデンティティを持たせることが可能であれば、アメニティの向上に一役買えるんだろうなぁ・・・と考えさせてくれたテーマパークのゴミ箱達であった。

(大阪事務所 なかがわ てんこう)



アルパック (株)地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社	〒600 京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル6階)	TEL (075)221-5132(代)
京都事務所		FAX (075)256-1764
大阪事務所	〒540 大阪市中央区城見1-4-70 (住友生命OBPプラザビル15階)	TEL (06)942-5732(代)
		FAX (06)941-7478
名古屋事務所	〒460 名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウチビル2階)	TEL (052)962-1224(代)
		FAX (052)962-1225
東京事務所	〒160 東京都新宿区新宿2-5-16 (霞ビル401号)	TEL (03)3226-9130(代)
		FAX (03)3226-9560
㈱九州地域計画研究所	〒810 福岡市中央区天神1丁目15番1号 (日之出ビル6階)	TEL (092)731-7671(代)
		FAX (092)731-7673
㈱アルパックインターナショナル	〒540 大阪市中央区谷町1丁目5番7号 (ストークビル天満橋10階)	TEL (06)943-7016
		FAX (06)943-7026
㈱都市居住文化研究所	〒604 京都市中京区東洞院通六角上ル 三文字町225 (朝陽ビル4階)	TEL (075)252-2231
		FAX (075)252-4417